四国大学紀要，(A) 51：43－57，2018
Bull. Skikoku Univ. (A) 51：43－57，2018

報　告

旧約聖書（オバデヤ書）を読む

蔵 谷 哲 也

An Exposition of the Book of Obadiah

Tetsuya KURATANI

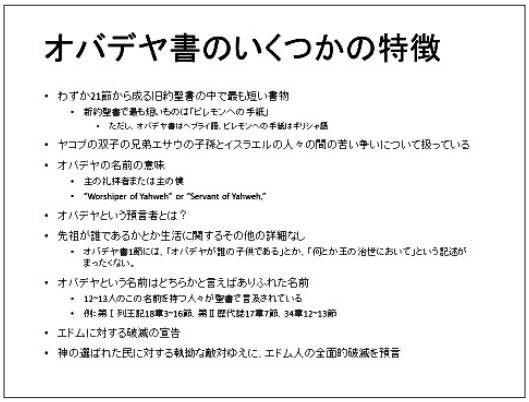
本稿は 2017 年 9 月 15 日，四国大学古川キャンパスにおける SUDAchi 講座で語った内容を修正・加筆したものです。[1] 講座の間に十分説明できなかったことの補足や，質問・コメントに対する回答として，ここに提示するものです。

スライド 1

聖書の御言葉はとこしえに立つと聖書に書かれていますから，この書物を読むことは，今を生きる私たちにとって，意義のあることです。単に過去に起こったことに関する記述と捉えない方が有益です。それはどうして有益なのかについては，オバデヤ書が新約聖書にどのように関わっているか，そして，その言おうとすることが，現代人にどのように関係するのかを説明しますので，お分かりになれると思います。聖書から学ぶことのできる教訓を個人的な生活に活用することができるからです。

聖書を読むことは大変有益なことであり，聖書を読むことに時間を費やすこともとてもよいことです。でも残念なことに人間は，自分の選好によって，選択し，行動するでしょう。特に，世の中には情報があふれ，実のところ，どの情報を受け入れて行けばいいのか，確固とした判断基準がありません。おそらく自分が知りたいこと，自分の考えに賛成してくれる意見や見解が判断基準となって，そのようなものを求めていくでしょう。そうではなく，神の御言葉である聖書を読み，神が人間に何を語っているかを，心静めて，受け入れていくことが必要です。聖書では，「聞くに早く，語るに遅く」と告げています。この場合，「聞くに早く」とは，聖書の御言葉を受け入れることを意味します。「語るに遅く」とは，聖書の御言葉に対して，即座に反論するのではなく，聖書の御言葉を神に祈りつつ瞑想することを意味していると思います。[2] 聖書を読むこと，特に通読することを私はお勧めいたします。皆様が，今回の話を聞いて，なお一層聖書を読むことの励みとなることを期待しております。そして，さらには，

スライド 2



聖書が人生における行動基準となって，聖書の御言葉で導かれる人生を送ることができると幸いなことです。

ついでながら，聖書では，偽預言者と真の預言者の二種類が登場します。その特徴を比較すると，次のような表 1 で要約できます。現代生活においても，自分が聞きたいことや自分自身の考えと合致するものを追い求めることが行動基準になると，それは危険な道を歩んでいる状況であることをお分かりになりますか。

表 1

偽預言者	真の預言者
自己の利益のために政治的目的のために働く	神と人に仕えるという霊的な目的のために働く
富豪のような財産を持つ	所有物はほとんど無しか全く無し
偽預言をする	真のメッセージのみを語る
人々の耳が聞きたいことだけ語る	いかに人々の間で人気がなくても，神が真の預言者に語るように告げたことのみを語る

出所：*life Application Bible* p.545.

オバデヤ書の特徴を最初にいくつか見ていきます。聖書 66 巻のどれであっても，その長さに関わらず，イエス・キリストについて書かれています。イエス・キリストという言葉が，その書に直接表示されていなくても，そういうことです。例えば，オバデヤという名前の意味は，「主の礼拝者」または「主の僕」という意味です。ここでの主とは，イエス・キリストのことです。

オバデヤという名前は，オバデヤ書においては，目立たない人物です。なぜかといいますと，オバデヤ書 1 章 1 節には，「オバデヤの父が誰である」とか，「〇〇王の治世において」といった語句がありません。[3] 王家や祭司の家系であるかどうかもこの節からは不明です。

聖書の様々な箇所におけるオバデヤという名前については，後のスライドで，聖書箇所を表示いたしますが，ある箇所のオバデヤが他の箇所のオバデヤと同一人物であるかどうか，断定し難いことです。

スライド 3

オバデヤとは旧約聖書に頻出する名前

- 旧約聖書に登場する他の12人も同じ名前である。
- オバデヤ書に登場するオバデヤの個人的な生活の詳細は、オバデヤ書にない。そこで、オバデヤは預言者的役割を持っていることしか読み取れない。
- 以下の12枚のスライドで、旧約聖書におけるオバデヤに関する記述を見ていく。

聖書の中で小預言者の書のみを取り出すと，オバデヤは 12 人の預言者の中の 4 番目の預言者です。オバデヤ書（10 ～ 12 節，17 節，21 節）で，エルサレム，ユダそしてシオンを頻繁に言及するので，南のユダ王国に属する預言者であることが示唆されています。

この書では，エドムに対する破滅の宣告がなされています。この破滅の宣告は執行されて，過去の歴史であり，読者には関係ないという立場を取るのではなく，この破滅の宣告の原因を知ることによって，教訓とし，個人的生活を変化させていくという立場を取りたいものです。

神の民に対して執拗に敵対し続けた結果が，エドム人の全面的破滅を導きました。エドム人と神の民の先祖は，同じ両親から生まれた兄弟の関係でした。兄弟であれば，仲がいいでしょうか。かえって私たちが最もよく知っている人たちがいかに簡単に恨みつらみの対象になってしまうことがありうることです。長年に亘る憎悪が，良識を覆す感情を引き起こすことがあります。でも，その帰結は，芳しいものではないことが，オバデヤ書を読むと読み取ることができると思います。

オバデヤという名称は，旧約聖書で少なくとも合計 12 節の中に登場しています。[4] このオバデヤ書と直接の関係があるかどうかは別にして，各節を考察しましょう。聖書には同じ名称が登場することがありますが，同じものを参照しているのか，別のものか，すぐに理解できない場合がありますから。ただし，オバデヤという名前が，主の礼拝者または主の

僕という意味を持ち，その意味が，聖書の文脈でオバデヤという名前を通して示されているか否かを知る機会を持つことができます。そこでこれから，スライド 4 からスライド 15 で，オバデヤの名称が出てくる聖書箇所を参照します。もう一度，繰り返しますが，これから参照する聖書箇所に登場するどのオバデヤが他のどのオバデヤと同一人物であるか，という問いに答えることを意図しておりません。[5]

スライド 4

オバデヤ：アハブの執事

- アハブは王宮をつかさどるオバデヤを呼び寄せた。オバデヤは非常に主を恐れていた。第一列王記18章3節：

スライド 4 は，第一列王記 18 章 3 節です。聖書の登場人物の名称は，その人の本質を表すことがあります。ここでは，オバデヤという名前は，主の僕という意味で，その人の人柄に相当しています。イゼベルは迫害することを許されていたのですが，一方では，オバデヤは，主の僕であることを公に告白し，イゼベルの残忍な行為を密かに阻止することができたのです。こうしたことは，アハブの妥協的でためらいがちな態度の奇妙なほどの影響力ゆえに起こった状況です。心の中では，アハブは真の神をいつも認めたいと思っていたようですが，イゼベルの圧倒的で残忍な性質によって，威圧されていたようです。[6] イゼベルは主の預言者達を全て抹殺しようとしていましたが，オバデヤは主に忠実な100人の預言者たちを密かに匿った主に忠実な僕だったのです。

スライド 5

オバデヤ：ダビデの子孫

- 第一歴代誌3章はダビデの子孫が列記されている。そして21節で、その子孫としてオバデヤの名前がある。
  - 「ハナニヤの子らはペラテヤとエシャヤ、その子レパヤ、その子アルナン、その子オバデヤ、その子シカニヤである。」（第一歴代誌3章21節）

スライド 5 では，第一歴代誌 3 章の 21 節が表示されています。この 3 章はダビデの家族とその後のユダの王たちの系図です。1 ～ 9 節までがダビデの系図，10 節以降がソロモンの後に続く子孫の系図です。従って，ここでのオバデヤはダビデ直系の末裔の一人であることが分かります。

スライド 6

オバデヤ：ダビデの大勇士の中の一人

- 第一歴代誌7章1～5節はイスラエル12部族の中のイッサカル族の勇士について書かれている。そして3節にオバデヤの名前がある。
  - 「イッサカルの子らはトラ、プワ、ヤシュブ、シムロムの四人。トラの子らはウジ、レパヤ、エリエル、ヤマイ、エブサム、サムエル。これは皆トラの子で、その氏族の長である。その子孫の大勇士たる者はダビデの世にはその数二万二千六百人であった。ウジの子はイズラヒヤ、イズラヒヤの子らはミカエル、オバデヤ、ヨエル、イシアの五人で、みな長たる者であった。」（第一歴代誌7章1～3節）

スライド 7

オバデヤ：ベニヤミン族の一人

- 第一歴代誌8章はベニヤミンの家系が書かれています。その中で38節でオバデヤの名前があります。
- アゼルには六人の子があり、その名はアズリカム、ボケル、イシマエル、シャリヤ、オバデヤ、ハナンで、皆アゼルの子である。（第一歴代誌8章38節）

第一歴代誌 8 章はベニヤミン族について書かれています。33 節でサウルの名前が出てきます。そしてサウルの子たちの名前もあります。サウルの子の一人がヨナタンであり，その血筋から，オバデヤが登場しています。

第一歴代誌 9 章はバビロン捕囚から帰還した人々の名前があげられています。4 節～ 9 節までに部族

ごとのかしらの名前が書かれています。10 ～ 12 節は祭司のかしらが書かれています。13 ～ 16 節はレビ人のかしらについてかかれてあり，その中の一人の名がオバデヤです。

エゼルとその後に続く名前は，ガド族の名前であり，年齢，または，真価または，ダビデのところにやってきた順番であるといいます。すなわち，オバデヤ，エリアブ，ミシマンナ，エレミヤ，アッタイ，エリエル，ヨナハン，エルザバデ，エレミヤ，マクバナイであり，合計 11 人でした。この見解は *John Gill's Exposition of the Bible.* によるものです。[8] この見解のように，順番に年齢や，真価や，結集した順番等の何らかの意義があるなら，オバデヤはその順番の上位に位置しています。

スライド 8

オバデヤ：レビ人の一人

- 第一歴代誌9章はベニヤミンの家系が書かれています。その中で16節でオバデヤの名前があります。
- レビびとのうちではハシュブの子シマヤ、ハシュブはアズリカムの子、アズリカムはハシャビヤの子で、これらはメラリの子孫である。またバクバッカル、ヘレシ、ガラル、およびアサフの子ジクリの子であるミカの子マッタニヤ、ならびにエドトンの子ガラルの子であるシマヤの子オバデヤおよびエルカナの子であるアサの子ベレキヤ、エルカナはネトパびとの村里に住んだ者である。 (第一歴代誌9章14~16節)

スライド 9

オバデヤ：ガド族から出た軍のかしら

- 第一歴代誌12章1～22節まではツイケラグに結集したダビデの勇士に書かれています。その中で9節でオバデヤの名前があります。
- ガドびとのうちから荒野の要害に来て、ダビデについた者は皆勇士で、よく戦う軍人、よく盾とやりをつかう者、その顔はししの顔のようで、その速いことは山にいるしかのようであった。彼らのかしらはエゼル、次はオバデヤ、第三はエリアブ、第四はミシマンナ、第五はエレミヤ、第六はアッタイ、第七はエリエル、第八はヨナハン、第九はエルザバデ、第十はエレミヤ、第十一はマクバナイである。これらはガドの子孫で軍勢の長たる者、その最も小さい者でも百人に当り、その最も大いなる者は千人に当った。 (第一歴代誌12章8~14節)

27 章でダビデは，イスラエルの軍人たちの組織編成をしています。ゼブルン族の頭がイシマヤであり，その父がオバデヤです。

ここでの，オバデヤはユダのヨシャパテ王の治世

スライド 10

オバデヤ：ゼブルン族の一人

- 第一歴代誌27章は12部族の軍隊長やつかさについて書かれています。その中で19節でオバデヤの名前があります。ただし、オバデヤは軍隊長やつかさではなく、オバデヤの子イシマヤがつかさです。
- ゼブルンのつかさはオバデヤの子イシマヤ。ナフタリのつかさはアズリエルの子エレモテ。
(第一歴代誌27章19節)

スライド 11

オバデヤ：ヨシャパテ王の治世のつかさ

- 第Ⅱ歴代誌17章はユダの王ヨシャパテのことについて書かれている。この王は主の道に励んでいいたので、主の祝福を豊かに受け、繁栄していた。そのつかさの一人がオバデヤである。
- 彼はまたその治世の三年に、つかさたちベネハイル、オバデヤ、ゼカリヤ、ネタンエルおよびミカヤをつかわしてユダの町々で教えさせ、
(第Ⅱ歴代誌17章7節)

スライド 12

オバデヤ：ヨシヤ王治世で、主の宮の修復の監督者

- 第Ⅱ歴代誌34章はユダ王国の王ヨシヤが主の宮を修復することについて、主に書かれている。この主の宮の修復の監督者の一人として、オバデヤの名前が挙げられている。
- その人々は忠実に仕事をした。その監督者はメラリの子孫であるレビびとヤハテとオバデヤ、およびコハテびとの子孫であるゼカリヤとメシュラムであって、工事をつかさどった。また楽器に巧みなレビびとがこれに伴った。 (第Ⅱ歴代誌34章12節)

3 年目に，つかさとして，ユダの町々に派遣されました。

ここで登場するオバデヤは，ユダ王国の王ヨシヤの時代において，主の宮修復の監督をするレビ人でした。

ここでのオバデヤは，氏族の長です。そしてエズラと共に帰還したヨアブの子孫のうちの中の一人，

エヒエルの子であると述べられています。

スライド 13

オバデヤ：エズラと共にバビロンから戻ってきた人々の中の1人

- エズラ記8章はアルタシャスタ王の治世にバビロン捕囚からエズラと共に帰還してきた人々のことが書かれている。
- ヨアブの子孫のうちではエヒエルの子オバデヤおよび彼と共にある男二百十八人。　(エズラ記8章9節)

スライド 14

オバデヤ：盟約に印を押した人々の中の一人

- ネヘミヤ記10章は盟約に印を押した人々や、その内容に関しての記述がある。そして、印を押した人々の名前が列記されているが、その中にオバデヤの名前がある。
- ハリム、メレモテ、オバデヤ、　(ネヘミヤ記10章5節)

ネヘミヤと共に神と，そして互いの間で盟約を結んだ人の一人がオバデヤです。ネヘミヤ記 10 章 1 節から 10 節の間に，彼らの名前が列記されています。盟約には，異邦人との縁を断つこと，安息日を守ること，神殿礼拝を大切にすること等が含まれます。[9]

スライド 15

オバデヤ：門衛であり、監督

- ネヘミヤ記12章は祭司、レビ人、そしてエルサレムの城壁の奉献式の記述がある。その中で、オバデヤの名前は門衛で、門の内の倉を監督したと書かれている。
- マツタニヤ、バクブキヤ、オバデヤ、メシュラム、タルモンおよびアックブは門を守る者で門の内の倉を監督した。　(ネヘミヤ記12章25節)

ネヘミヤ記 12 章 25 節によると，オバデヤはネヘミヤの時代の門衛でした。

スライド 16

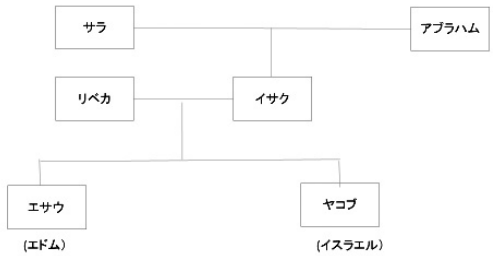
オバデヤ書の概略

- エドム人に対する裁き（1-14節）
  - 破滅がエドム人に襲いかかる（1－4節）
  - 完全な荒廃が起こる（5－9節）
  - 理由：ユダの困難をエドム人は喜んだから（10－14節）
- 主の日（15－21節）
  - エドム人と他の国々に対する裁き（15－16節）
  - 主の日のおけるイスラエルの地位（17－21節）
    - イスラエルの救い（17－18a節）
    - エドムに対する破壊（18b節）
    - 神の国の1部分としてのイスラエルの領土の拡大（19－21節）

オバデヤ書前文を朗読する前に，概略を見ておきましょう。この書は 2 つの主要部に区分できます。1 ～ 14 節は，エドム人の崩壊に関することで，1 章 15 ～ 21 節は主の日に関する記述です。1 ～ 14 節では，オバデヤ預言者を通して，エドム人に対する神の燃えるような不快感が表明され，エドム人達は彼らの罪の説明責任があると要求しています。特に地理上の安全さゆえの高慢の罪やユダの没落に対して歓喜した罪に対してです。よくないことが起こるという神の裁きが，彼らの上にやってくること。そして，罪を悔い改めて，神に立ち返れという招きに基づく刑の執行猶予の望みがないことをこの預言者は告げています。エドム人は完全に断たれると語られています。15 ～ 16 節では，エドム人と神の全ての敵が破滅するが，一方では，神の民が救われ，神の王国が勝利するという来るべき主の日のことを預言的に触れています。[10]

スライド 17

神の民(イスラエル）とエドム人は同じ血筋で兄弟



スライド 17 では，エドム人と神の民イスラエルは，リベカとイサクの間に生まれた兄弟であることを示しています。

スライド 18

イスラエルとエドムの争いの歴史

イスラエルはヤコブを先祖とし、エドムはエサウを先祖とする	創世記25章23節
ヤコブとエサウは母の胎で争う	創世記25章19～26節
エサウは長子の権利と祝福をヤコブに売り払う	創世記29～34節
エドム人はイスラエル人がエドム人の領土を通過することを拒否	民数記20章14～22節
イスラエルの諸王は常にエドム人と紛争があった	
●サウル	Ⅰサムエル14章47，48節
●ダビデ	Ⅱサムエル8章13，14節
●ソロモン	第Ⅰ列王記11章14～22節
●ヨラム	第Ⅱ列王記8章20～22節 第Ⅱ歴代誌21章8節
●アハズ	第Ⅱ歴代誌28章16節
エドム人はバビロンがエルサレムを破壊することを奨励した	詩篇137篇7節

スライド 18 はイスラエルとエドムの関係を示しています。[11] その関係は旧約聖書時代を通じた継続的な憎悪で特徴付けられます。ここに掲げてある聖書箇所を後で，参照して欲しいのですが，創世記 25 章 23 節をここで，見ることにしましょう。

主は彼女に言われた，
「二つの国民があなたの胎内にあり，
二つの民があなたの腹から別れて出る。
一つの民は他の民よりも強く，
兄は弟に仕えるであろう」。（創世記 25 章 23 節）

この箇所は，リベカが身ごもっているとき，胎内の 2 人が胎内で押し合ったので，リベカが主に聞いたことに対する主の返事です。兄とはエサウで，弟はヤコブ（後のイスラエル）です。この返事は，預言であり，その通りになります。弟が兄に仕えることが，当時の習慣でしたが，神はこのパターンを逆にしています。神の贖いという目的においては，人の立場は，自然な成り行きで決定するものではなく，神の恵みと御心によって決定すると言えます。[12]

スライド 18 に表示される様々な事柄が，オバデヤの預言の背景を形成しています。いかにエドム人が神の民が苦しむことを喜んでいたかが詩篇 137 篇 7 節で表されています。次の通りです。

主よ，エドムの人々がエルサレムの日に，
「これを破壊せよ，これを破壊せよ，
その基までも破壊せよ」と
言ったことを覚えてください。（詩篇 137 篇 7 節）

ではスライド 19 からスライド 24 までは，オバデヤ書の全文が表示されます。音読したいと思います。[13]

スライド 19

1:1オバデヤの幻。
主なる神はエドムについてこう言われる、
われわれは主から出たおとずれを聞いた。
ひとりの使者が諸国民のうちにつかわされて言う、
「立てよ、われわれは立ってエドムと戦おう」。
1:2見よ、わたしはあなたを国々のうちで
小さい者とする。
あなたはひどく卑しめられる。
1:3岩のはざまにおり、高い所に住む者よ、
あなたの心の高ぶりは、あなたを欺いた。
あなたは心のうちに言う、
「だれがわたしを地に引き下らせる事ができるか」。
1:4たといあなたは、わしのように高くあがり、
星の間に巣を設けても、
わたしはそこからあなたを引きおろすと
主は言われる。

スライド 20

1:5もし盗びとがあなたの所に来、強盗が夜きても、
彼らは、ほしいだけ盗むではないか。
ああ、あなたは全く滅ぼされてしまう。
もしぶどうを集める者があなたの所に来たなら、
彼らはなお余りの実を残さないであろうか。
1:6ああ、エサウはかすめられ、
その隠しておいた宝は探り出される。
1:7あなたと契約を結んだ人々はみな、
あなたを欺き、あなたを国境に追いやった。
あなたと同盟を結んだ人々はあなたに勝った。
あなたの信頼する友はあなたの下にわなを設けた、
しかしその事を悟らない。
1:8主は言われる、
その日には、わたしはエドムから知者を滅ぼし、
エサウの山から悟りを断ち除かないだろうか。

スライド 21

1:9テマンよ、あなたの勇士は驚き恐れる。
人はみな殺されてエサウの山から断ち除かれる。
1:10あなたはその兄弟ヤコブに暴虐を行ったので、
恥はあなたをおおい、あなたは永遠に断たれる。
1:11あなたが離れて立っていた日、
すなわち異邦人がその財宝を持ち去り、
外国人がその門におし入り、
エルサレムをくじ引きにした日、
あなたも彼らのひとりのようであった。
1:12しかしあなたは自分の兄弟の日、
すなわちその災の日をながめていてはならなかった。
あなたはユダの人々の滅びの日に、
これを喜んではならず、
その悩みの日に誇ってはならなかった。

スライド 22

1:13あなたはわが民の災の日に、
その門にはいってはならず、
その災の日にその苦しみをながめてはならなかった。
またその災の日に、
その財宝に手をかけてはならなかった。
1:14あなたは分れ道に立って、
そののがれる者を切ってはならなかった。
あなたは悩みの日にその残った者を
敵にわたしてはならなかった。
1:15主の日が万国の民に臨むのは近い。
あなたがしたようにあなたもされる。
あなたの報いはあなたのこうべに帰する。
1:16あなたがたがわが聖なる山で飲んだように、
周囲のもろもろの民も飲む。
すなわち彼らは飲んでよろめき、
かつてなかったようになる。

スライド 23

1:17しかしシオンの山には、のがれる者がいて、
聖なる所となる。
またヤコブの家はその領地を獲る。
1:18ヤコブの家は火となり、
ヨセフの家は炎となり、
エサウの家はわらとなる。
彼らはその中に燃えて、これを焼く。
エサウの家には残る者がないようになると
主は言われた。
1:19ネゲブの人々はエサウの山を獲、
セフェラの人々はペリシテびとを獲る。
また彼らはエフライムの地、
およびサマリヤの地を獲、
ベニヤミンはギレアデを獲る。

スライド 24

1:20ハラにいるイスラエルの人々の捕われ人は、
フェニキヤをザレパテまで取り、
セパラデにいるエルサレムの捕われ人は、
ネゲブの町々を獲る。
1:21こうして救う者はシオンの山に上って、
エサウの山を治める。
そして王国は主のものとなる。

スライド 25

内容の説明

それでは，オバデヤ書の内容の説明をします。

スライド 26

1章1節

オバデヤの幻。
主なる神はエドムについてこう言われる、
われわれは主から出たおとずれを聞いた。
ひとりの使者が諸国民のうちにつかわされて言う、
「立てよ、われわれは立ってエドムと戦おう」。

スライド 26 をご覧ください。1 節の最初に，「オバデヤの幻」と書かれています。この文字通りの意味であれば，幻の形態で，しばしば神から来た預言の言葉です。ハバクク書 1 章 1 節でも，「預言者ハバククが見た神の託宣。」と書かれています。つまり幻ですから，「見る」という動詞が使われています。またこの幻は，特に預言者に伝えられる託宣を象徴する用語という解釈もあります。[14]

「主なる神はエドムについてこう言われる，」という語句を使うことによって，オバデヤのメッセージは神の権威があることを確言しています。つまり，預言者は自分自身の言葉でもないし，自分自身の権威で語ることもありません。この預言者の生い立ちははっきりしませんが，オバデヤのメッセージは神から来ていることを示すものです。メッセージの価値と権威は「主が語られた」という基盤に基づくものであり，預言者の名声や卓越性に依存しません。

預言者とは，有名人であるとか専門家であるといったような人間の肩書には関係なく，神が本当に語られたことを，少しも曲げることなく，そのまま語る人であります。[15]

神とはYahwehという名前に言い換えることができます。Yahwehとは（聖書における神とイスラエル人の）特別な契約の名前です。

エドムとは，死海の南部に位置する地理的な領域と，その領土を占領した人々の両者を象徴しています。ユダの南側の隣国で国境線を共有しています。エドム人の領土を通って旅行するキャラバン隊に課税することで繁栄を享受したと言われています。[16]

「われわれは主から出たおとずれを聞いた。」とは，不確かな報告ではなく，神から真で重要な啓示を受けたという意味です。[17]

「ひとりの使者が諸国民のうちにつかわされて言う，」この箇所と，その後に続く2～4節に，ほぼ同じ言葉が，エレミヤ書49章14～16節に登場します（スライド27参照のこと）。[18] このことは，エレミヤに示された神からの同じ任務をオバデヤも受けたことを暗示しているのではないでしょうか。

スライド28は1章1節の語句の説明の続きです。

スライド27

似たような語句の登場する聖書箇所

オバデヤ書1章1節後半～4節	エレミヤ書49章14～16節
ひとりの使者が諸国民のうちにつかわされて言う。	49:14わたしは主からのおとずれを聞いた。
「立てよ，われわれは立ってエドムと戦おう」。	ひとりの使者がつかわされて万国に行き，
1:2見よ，わたしはあなたを国々のうちで	そして言った，
小さい者とする。	「あなたがたは集まり，行って彼を攻め，立って戦え。
あなたはひどく卑しめられる。	49:15見よ，わたしはあなたを万国のうちに小さい者とし，人々のうちに卑しめられる者とする。
1:3岩のはざまにおり，高い所に住む者よ，	49:16岩の割れ目に住み，山の高みを占める者よ，
あなたの心の高ぶりは，あなたを欺いた。	あなたの恐らしい事と，あなたの心の高ぶりが，
あなたは心のうちに言う，	あなたを欺いた。
「だれがわたしを地に引き下らせる事ができるか」。	あなたは，わたしのように巣を高い所に作っているが，
1:4たとい，あなたは，わしのように高くあがり，	わたしはその所からあなたを取りおろすと
星の間に巣を設けても，	主は言われる。
わたしはそこからあなたを引きおろすと	
主は言われる。	

スライド28

ひとりの使者が諸国民のうちにつかわされて言う、
「立てよ、われわれは立ってエドムと戦おう」。

- エドムの敵の連合が、エドムを攻撃するために立ち上がることは、迫りくる裁きの神の言葉を確かなものとしている。
- 主は疑うことを知らない人間を道具として使い、神の裁きを行う。
- 「立てよ」とは、戦争に対する典型的な召喚

スライド29

ジェホバ（ヤハウェ） 神の契約の名前

- 神の名前は神の性質と特徴を明らかにする。神の名前を通して、我々は神を知る。
- ヘブライ語で2つの主要な名前がある。:
- (1) エロヒム（力強い創造主） 翻訳すると、神
- (2) YHWH = ジェホバ またはヤハウェ（ユダヤの発音）翻訳すると主
- . Yhwhとは神の個人的な契約名。神の友達、神を知っていて、神との契約にある人々に関して使われる名前
- エル（エロヒム）は、全ての人々が神のことを知るようになる名称
- ヤー（ヤハウェ）は神の契約の名前であり、この名前によって、神の事を知る神の契約の人々に対して、神御自身をより親密に啓示される

スライド29で，神の御名に関する付加的説明をしています。

スライド30

1章2節
見よ、わたしはあなたを国々のうちで小さい者とする。あなたはひどく卑しめられる。

- エドム人は数々の戦いの中で非常に小さい者、蔑まれた者となっていったということ。

スライド31

1章3節
岩のはざまにおり、高い所に住む者よ、
あなたの心の高ぶりは、あなたを欺いた。
あなたは心のうちに言う、
「だれがわたしを地に引き下らせる事ができるか」。

- 高ぶりとは神に裁かれる罪である。
- そして、エドムの致命的な見込み違いをもたらすだろう。
- エドムは自分の高い高慢な地位を誇って、エドムの敵を愚弄している。
  - 「だれがわたしを地に引き下らせる事ができるか」。
- エドムは岩のはざまにおり、安全であると認識している。しかし、エドムが地上の要塞化に信頼することは、命とりであることが分かるようになるだろう。
- 岩とはヘブル語でセラと翻訳され、死海の南部で50マイル先にある岩山の中に隠れてたほとんど難攻不落の大規模な要塞が、エドムの首都の名前である。

1章2節（スライド30）では，今や，神が語って

います。神の御言葉は，空しく地に落ちることはなく，必ず成就します。従って，「見よ，わたしはあなたを国々のうちで小さい者とする」という言葉は，その成就がまだ未来のことであっても，あたかもそれが既に成就されたかのごとく確実であるという意味です。エドム人の膨れ上がった高慢さが，今や泡のように破裂しようとしているのです。[19] そうすると，「あなたはひどく卑しめられる」ことも既に不可避的な運命であります。

スライド 31 では，高慢に関する記述です。[20] 人間の高慢は神が嫌われることです。つまり，それは神が裁かれる罪なのです。それは箴言 16 章 18 節に次のように述べられていることから分かります。「高ぶりは滅びにさきだち，誇る心は倒れにさきだつ。」ところが，「だれがわたしを地に引き下がらせる事ができようか」と，心の高ぶりはどうして生じたのでありましょうか。エドム人が力として理解していたものは，結局，エドム人の没落でした。オバデヤ書の文脈では，次のものです。(1) 都市における安全（1 章 3，4 節）（2）エドム人の自給自足という高慢（1 章 4 節）（3）富（1 章 5，6 節）（4）同盟国（1 章 7 節）（5）知恵（1 章 8，9 節）。こうした高慢は全て神によって覆されています。[21]

このヘブル語でセラという場所は，後にペトラ（意味は岩）と言われる場所ではないかと言われています。

エドム人のより繁栄した領域に何とかして入っていくために，ペトラと呼ばれる狭く岩の多い地形を通らなければなりません。百万人の軍隊がいても，一度に一人ずつ入るしかなかったのです。それでエドム人は，彼らの要塞でとても安心していたのです。

セラとは，岸壁に刻まれた都市であるペトラの古代要塞でした。エドム人の要塞であるのみならず，インド貿易の前哨基地でした。[22] ここでヨクテルと名付けられたセラが著名なペトラです。[23]

エドム人は自分たちの居住地を誇っていました。しかし，今日では，そこはいわゆる新・世界 7 不思議と呼ばれる場所であり，観光名所でしかありません。エドム人の国は実質的に歴史の中に消えてしまったのです。1 章 4 節で語られていることは，どんなに人間が誇っても，神の主権から逃れることは決してできないということです。人がどんなに高いところに登ろうとしても，神は，人よりもはるかに高いところにおられます。おごり高ぶることは，自滅への確実な道であると，聖書は警告しています。1 章 4 節は大げさな表現がなされています。これはエドム人の偽りの安心感を表現しています。

スライド 32

第Ⅱ列王記14章7節

- 14:7アマジヤはまた塩の谷でエドムびと一万人を殺した。またセラを攻め取って、その名をヨクテルと名づけたが、今日までそのとおりである。

スライド 33

1章4節
たといあなたは、わしのように高くあがり、
星の間に巣を設けても、
わたしはそこからあなたを引きおろすと
主は言われる。

- わしはその力とその力強い飛翔で名高い。
- しかし、星の間にさえ設けられた巣であっても、決して神の主権外ではない。

スライド 34

1章5節
もし盗びとがあなたの所に来、強盗が夜きても、
彼らは、ほしいだけ盗むではないか。
ああ、あなたは全く滅ぼされてしまう。
もしぶどうを集める者があなたの所に来たなら、
彼らはなお余りの実を残さないであろうか

- 神は、エサウが根こそぎその財宝が奪われることを、盗人とぶどうを収穫する者と比較をされている。盗人でさえ、ごっそりと家の中の全ての物をふつうは盗むわけではない。そしてぶどうの収穫も、律法に定められている通り全て摘み取ってはいけない（申命記24:21）。けれども、エドムが滅ぼされる時は根こそぎ取られていく。

1 章 5 節では，神のエドム人の行ないに対する御怒りがいかに大きいかを表しています。例えば，木が切り倒されても，根の部分が残っていれば，そこから，木は再び，成長することもありますが，ここでの記述では，「ああ，あなたは全く滅ぼされてしまう」とあります。

申命記 24 章 21 節で，ブドウの収穫は，全て摘み取ってはいけないと書かれています。これは，在留異国人や，みなしごや，やもめのために残しておきなさいということです。この律法の内容を上回る困難がエドム人に与えられるということです。

ただ，注意しなければならないことは，この箇所だけ取り上げると，エドム人の行為に対する復讐ゆえに，厳しい裁きが起こるという印象を持ってはならないということです。神は完全なお方であり，公平なお方です。従って，エドム人は，エドム人にふさわしいものを単に受け取っているだけです。[24]

「よい種をまくと，良い刈り取りを受ける」という話を聞いたことがあると思います。聖書には人は種を蒔けば，その刈り取りもすることになりますと書かれています。[25] そうであるなら，悪い種をまくと，その刈り取りも，その種を蒔く人が刈り取ることになります。エドム人の場合も例外ではありません。種の大きさは通常，小さいです。それが成長して，実が生ると，実は種より通常大きかったり，実の数が種の数より多いですね。このいわゆる刈り取りの法則を顧みると，悪しき行ないという種を蒔くと，その結果である悪しき行いのより大きな結果は誰が刈り取りますか。蒔いた本人が刈り取ります。

スライド 35

1章6節
ああ、エサウはかすめられ、
その隠しておいた宝は探り出される。

- エドムは完全に一掃されるだろう。
- エドム人が岩の貯蔵室に保管しておいた、貴重品や、隠された宝物さえも、略奪されるだろう。

スライド 35 では，5 節の内容の続きです。エドム人の崩壊は，完璧なものであり，人が秘蔵していたものも，全て取り去られるのです。[26] この状況から，新約聖書のマタイによる福音書 6 章 19 節～ 21 節「あなたがたは地上に富を積んではならない。そこでは，虫が食ったり，さび付いたりするし，また，盗人が忍び込んで盗み出したりする。富は，天に積みなさい。そこでは，虫が食うことも，さび付くこともなく，また，盗人が忍び込むこともなく，また盗人が忍び込むことも盗み出すこともない。あなたの富のあるところに，あなたの心もあるのだ。」を思い出す人も多いと思います。

スライド 36

1章7節
あなたと契約を結んだ人々はみな、
あなたを欺き、あなたを国境に追いやった。
あなたと同盟を結んだ人々はあなたに勝った。
あなたの信頼する友はあなたの下にわなを設けた、
しかしその事を悟らない。

- エドムを敵が攻めた時に、エドムの同盟者であったとされる者たちがその敵にエドムを明け渡す。明け渡すだけではなく、その略奪に加担する。
- そしてそのような同盟でしかないことにエドム自身は気づいていない。「それを悟らない」とある。私たちが高慢の内に築いたと思っている仲間は、本当の仲間ではない。私たちは高慢になると、本当の友を見失う。自分に都合の悪いことをはっきり言う友、密かに愛するよりもあからさまに責める友（箴言27:2）は、私たちは気に入らない。けれどもそのような友こそ、私たちが苦しみの時に共にいてくれる。けれどもエドムのように自分が高慢になっていると、今の同盟者がすぐに裏切るであろうことを気づくことができない。

1 章 1 節の中にある「諸国民」とは，エドム人の同盟者たちのことです。エドム人が，同盟者（つまり友人）に裏切られるということは，正義の問題であります。エドム人は兄弟であるヤコブを裏切ったのです。このことは 1 章 10 節に「あなたはその兄弟ヤコブに暴虐を行った」と書かれています。エドム人はその帰結を刈り取っているように見えます。

エドム人の同盟者たちは，エドム人の都市に入ることを許されましたが，エドム人に背を向けて，エドム人を征服したのであります。つまりエドム人を崩壊させる手段は，かつての同盟者だったのです。[27] 裏切りの報酬は裏切りだったということです。

1 章 8・9 節は知恵について語られています。エドム人は知恵を誇っていました。知恵は人間が生きていく上で，必要なものです。しかしながら，神の知恵と人の知恵の間に違いがあります。エドム人はこの世の様々な道で賢い者であったかもしれません

スライド 37

1章8節：
主は言われる、
その日には、わたしはエドムから知者を滅ぼし、
エサウの山から悟りを断ち除かないだろうか。
1章9節：
テマンよ、あなたの勇士は驚き恐れる。
人はみな殺されてエサウの山から断ち除かれる。

- 現在の世界遺産にもなっている「ペトラ」があった。もう一つエドムにはペトラから少し東に「テマン」という大きな都市があった。そこは学術都市であった。「テマン」はエサウの息子エリファズの子の名前から来ている。苦しんでいるヨブを訪問した友人の一人が、「テマン人エリファズ（ヨブ2:11）」でした。彼は知恵のある人であると自負していた。それはテマン出身だからである。
- 「テマン」は知恵のある町として知られていたが、それにも関わらず、彼らはこの破滅については無知だった。知恵の初めは何か？「主を恐れる」こと（箴言9:10）。どんなに知識を持っていても、主を恐れる所から来る知恵を持っていなければ、何をしても結局空しい。

スライド 38

1章10節：
あなたはその兄弟ヤコブに暴虐を行ったので、
恥はあなたをおおい、あなたは永遠に断たれる。

- エドムの問題は、高慢の次に「ヤコブへの暴虐」であった。神は、ヤコブが「あなたのその兄弟」であると強調されている。同じイサクから生まれた者であったにも関わらず、彼らはそれに相応しい憐れみや助けを与えなかった。
- 主がアブラハムに対して「あなたをのろう者をわたしはのろう。（創世12章3節）」と言われた。事実、聖書だけでなく歴史を通じてユダヤ人を呪った民族、国、個人は呪いを受けている。

スライド 39

1章11節：
あなたが離れて立っていた日、
すなわち異邦人がその財宝を持ち去り、
外国人がその門におし入り、
エルサレムをくじ引きにした日、
あなたも彼らのひとりのようであった。
1章12節：
しかしあなたは自分の兄弟の日、
すなわちその災の日をながめていてはならなかった。
あなたはユダの人々の滅びの日に、
これを喜んではならず、
その悩みの日に誇ってはならなかった。
1章13節：
あなたはわが民の災の日に、
その門にはいってはならず、
その災の日にその苦しみをながめてはならなかった。
またその災の日に、
その財宝に手をかけてはならなかった。
1章14節：
あなたは分れ道に立って、
そののがれる者を切ってはならなかった。
あなたは悩みの日にその残った者を
敵にわたしてはならなかった。

が，実は愚かだったのです。なぜかと言うと，彼らは神を無視し，嘲ったからです。箴言 9 章 10 節には「主を恐れることは知恵のもとである，聖なる者を知ることは，悟りである。」と口語訳聖書に書かれています。[28]　ここで「主を恐れる」という意味は，生活において実用的な機能を果たす敬虔な姿勢ということです。[29]

1 章 10 節には「その兄弟ヤコブに暴虐を行ったので，」とあります。この暴虐とは何でしょうか。その 1 例が先ほど紹介した詩篇 137 篇 7 節の状況です。エルサレムが陥落されつつあるときに，神の民が困窮の中にありましたが，彼らを助けるどころか，彼らが滅ぼされるままにしておいたのです。そして，エルサレムが陥落した後に残されたものを略奪したのです。[30]

1 章 10 節で語られたその兄弟ヤコブに対する暴虐の内容が 1 章 11 ～ 14 節に記述されています。11 ～ 14 節で叙述された出来事の生々しさは，紀元前 586 年のユダ王国の首都エルサレムの破壊に最も自然に当てはまりそうです。

1 章 11・12 節で，ユダ王国が異邦人に攻撃されている時，エドム人は，兄弟であるユダ王国を助けるべきでした。しかし関わろうとしませんでした。目の前で起こっている邪悪な行為を容認していたのです。犯罪が起こっているのを見ているのに，傍観者の立場をとり続けることは正しいことでしょうか。ヤコブの手紙 4 章 17 節によると，「人が，なすべき善を知りながら行わなければ，それは彼にとって罪である。」と書かれています。

1 章 13 節は例えて言えば，ハリケーンが通過した都市を略奪する人々のようです。他人の災難を利用するわけですから，窃盗の中でも，最もひどいやり方の一つです。

1 章 14 節の状況は次の様に叙述できます。神の民が敵から逃げて，南部に向かう時に，エドム人は，逃亡者を捕らえるためにそこにいました。そして，

スライド 40

1章11～14節についてのコメント：

- これはバビロンがエルサレムを破壊したとき、エドムが取った行動。エルサレムの町、その城壁の門のところで彼らは知らぬ顔をしていた。彼らが残虐な形態で殺されている時に何の憐れみも示さなかった。むしろ、彼らが滅んでいく様を喜び、そして中にある略奪品に手を出していた。そして逃げる道をも妨げている。生き残った者たちをバビロンに手渡している。
- 私たちは憐れみを閉ざさないこと、たとえ自分の敵であってもその不幸を喜ばないことが大切。愛は、「不正を喜ばずに真理を喜びます。（1コリント13:6）」とある。これを、災いを喜ばないで、真実を喜ぶと訳すこともできる。自分の敵に災いが下ったら、それを自分の恨みを発散させて喜ぶのではなく、神の復讐のことを思って、かえって神を恐れること。「愛する人たち。自分で復讐してはいけません。神の怒りに任せなさい。それは、こう書いてあるからです。『復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする、と主は言われる。』（ローマ12:19）」

スライド 41

1章15節：
主の日が万国の民に臨むのは近い。
あなたがしたようにあなたもされる。
あなたの報いはあなたのこうべに帰する。
1章16節：
あなたがたがわが聖なる山で飲んだように、
周囲のもろもろの民も飲む。
すなわち彼らは飲んでよろめき、
かつてなかったようになる。

- 「主の日」とは終わりの日におけること。ここではエドムだけでなく、エルサレムを我が物にするすべての国々に対して、主が報いられることが語られている。ゼカリヤ書14章によると、エルサレムがすべての国によって荒らされる。ヨエル書においても、イスラエルの地に対して諸国が行ったに対して、主が裁かれる。ここで国々が「飲んでよろめき、かつてなかったようになる」とあるが、これは神の怒りの杯を飲むということ（黙示14:10参照）。彼らがエルサレムに対して与えたのと同じ苦しみを、彼らが受けるということ。
- 出エジプト記にある律法で、「目には目を。歯には歯を。」という言葉がある。それは復讐してもよいという言葉ではなく、正しい判決の基準。この基準をもって神が、世の終わりに各人を裁かれる。

彼らを奴隷として売り飛ばしたのです。

スライド 40 では，1 章 11 ～ 14 節に関するコメントです。[31]

1 章 15 節では，主の日が万国の民に臨むのに近いと最初に述べ，それから，「あなた」という単数形を持って，エドム人に対する裁きが語られています。つまり，ここでのオバデヤの預言は，世の終わりにおける神の敵（諸国）に対する裁きの預言が最初にあり，次にエドム人に対する裁きが語られています。[32]

1 章 16 節では，「あなたがた」という複数形が使われています。神の御怒りの盃を全ての国が飲むという最終的な主の日を参照しています。

スライド 42

1章17節：
しかしシオンの山には、のがれる者がいて、
聖なる所となる。
またヤコブの家はその領地を獲る。

- シオンの山とは、イスラエル、特にエルサレムを象徴している。「聖なる」という用語は、「分離しておく」という意味で、しばしば、イスラエル国家に適用される。散らばされる代わりに、イスラエルは最終的に約束の地を取り戻すと預言されている。そして、ヤコブの家とは、イスラエルを意味する。
- 神の憐れみとは、旧約聖書預言に共通している一つの側面である。いたるところで、すべての罪びとを単に滅ぼす代わりに、神は神に従う人には憐れみを差し伸べられる。イスラエルの民が生存できるのは、彼ら自身の実績ゆえではなく、神の憐れみと義ゆえであることを、イスラエルの民はしばしば、釘を刺されてきた。このことは申命記9章4～8節に表記されている。（次のスライドを参照すること）
- エドム人の悔いは、神が裁かれたときに完全に崩壊した。対照的に、イスラエルの国は生き残り、今日まで存在している（アモス書9章8節、マラキ書2章1～5節）。エサウの子孫のいくらかはおそらく地上にまだいるであろうが、次の節は、エドム人の誰一人も千年王国まで生き延びないであろうことを示唆しているように見える。終末に先立って、かつてはエドム人に属していた土地は、イスラエルの民によって占領されるであろう（アモス書9章12節）

スライド 42 では，主の日において，イスラエルがどのような状況になるかを預言しています。[33]

スライド 43 は，なぜ神の民が生存できるのかという根拠を表す聖書箇所（申命記 9 章 4 ～ 8 節）を示しています。

スライド 43

神の民が生存できたのは、神の民の正しさゆえではなく、神の憐れみと義ゆえであること（申命記9章4～8節）

- 9:4 あなたの神、主があなたの前から彼らを追い払われた後に、あなたは心のなかで『わたしが正しいから主はわたしをこの地に導き入れてこれを獲させられた』と言ってはならない。この国々の民が悪いから、主はこれをあなたの前から追い払われるのである。
- 9:5 あなたが行ってその地を獲るのは、あなたが正しいからではなく、またあなたの心がまっすぐだからでもない。この国々の民が悪いから、あなたの神、主は彼らをあなたの前から追い払われるのである。これは主があなたの先祖アブラハム、イサク、ヤコブに誓われた言葉を行われるためである。
- 9:6 それであなたは、あなたの神、主があなたにこの良い地を与えてこれを得させられるのは、あなたが正しいからではないことを知らなければならない。あなたは強情な民である。
- 9:7 あなたは荒野であなたの神、主を怒らせたことを覚え、それを忘れてはならない。あなたがたはエジプトの地を出た日からこの所に来るまで、いつも主にそむいた。
- 9:8 またホレブにおいてさえ、あなたがたが主を怒らせたので、主は怒ってあなたがたを滅ぼそうとされた。

スライド 44

1章18節：
ヤコブの家は火となり、
ヨセフの家は炎となり、
エサウの家はわらとなる。
彼らはその中に燃えて、これを焼く。
エサウの家には残る者がないようになると主は言われた。

オバデヤがこの警告を発する数百年前、イスラエルの民は2つの王国に分離した。ソロモン王の統治のちょうどその後で、10部族がヤロブアムに従い、北王国（イスラエル王国）となった。残りの2部族、ユダ族とベニヤミン族がソロモンの後継者レハブアムに従った。これが南王国（ユダ王国）である。

1章18節のヤコブの家が北王国であり、ヨセフの家が南王国である。イスラエルの最終的な贖いの一部分は、こうした王国の統合であろう。

エドムの全体的で完璧な崩壊がここで生々しいイメージとして与えられている。火がわらや枯草を通して非常に速やかに燃え広がり、そして最後は何も残らない。1章16節で特に言及されたように、神に立ち向かう民はある日、あたかも決して存在していなかったのごとく、抹消されてしまうだろう。

スライド 45

1章19節
ネゲブの人々はエサウの山を獲、
セフェラの人々はペリシテびとを獲る。
また彼らはエフライムの地、
およびサマリヤの地を獲、
ベニヤミンはギレアデを獲る。

- イスラエルに対するエドム人の最悪な罪の一つは、1章14節で言及されたように、神の民を侵入者たちに手渡すことを助けたことである。神の裁きとは、他人に対して犯した同じ罪の苦しみがしばしば、その中に含まれる。エドム人に対する最後の審判とは、敗北を受け、辱めを受け、実質的に破壊された後で、エドム人たちの領土が、彼らが嫌っていたちょうどその人々によって占領されるであろうということである。
- エサウの山とは、エドム人の領土を参照している。ここで興味深いことは、エドム人の領土が占領されるだけではなく、イスラエルの敵であるペリシテ人の領土も占領されるであろうということだ。ベニヤミン族は小さな部族であるが、ギレアデの大領土を所有することになるだろう。ネゲブの人々は、ヨシュア記10章4節、セフェラの人々はエレミヤ書17章26節で言及されている。

スライド 44 では，主の日には，イスラエルがエドムの地を占領することになるでしょう。その戦いの中に，主が共におられてエドムの地を焼き尽くされ，エドム人は全滅するでしょう。[34]

スライド 45 の 1 章 19 節とは，エドムだけでなく他の地に対してもイスラエル人が占領するという預言です。[35]

スライド 46

1章20節：
ハラにいるイスラエルの人々の捕われ人は、
フェニキヤをザレパテまで取り、
セパラデにいるエルサレムの捕われ人は、
ネゲブの町々を獲る。

- オバデヤの預言によると、エドム人は、辱めを受け、滅ぼされるのみならず、かれらの領土は、嫌っていたちょうどその人々によって占領されるであろうということである。古代中東の考え方では、これは、踏んだり蹴ったりの目に遭わせることである。19節と20節はこれらの占領の内容を幾分告げている。オバデヤがこの預言をしてから間もなく、エドム人の破滅は起こったが、この預言のある側面は終わりの時代になって初めて起こるであろう。
- 「ザレパテ」はレバノンにある町。
- ネゲブはヨシュア記10章40節で言及されているが、セパラデは容易に識別できない。小アジアのサルディスかもしれない。なぜなら、アッカド語では、その名前は、「セパラデ」のように聞こえるからである。

1 章 20 節もイスラエルによる占領の内容を告げています（スライド 46）。[36]

スライド 47

1章21節：
こうして救う者はシオンの山に上って、
エサウの山を治める。
そして王国は主のものとなる。

- 「救う者」とは、かつての士師のような存在の人々。イスラエルが圧制の中にいた時に、そこから救助する人々がイスラエル人の中から主が起こされる。そして、エサウの山（エドム人の領土）を治める。そして彼らはシオンの山（エルサレムのこと）に上り、主を崇める。
- 「王国は主のものとなる」とは、イスラエルが最終的に復興し、主が全治を治めるということ。 ゼカリヤ書14章9節では「主は全地の王となられる。その日には、主ひとり、その名一つのみとなる。」と書かれている。

スライド 48

新約聖書における
オバデヤ書

主の日とは，イスラエルの復興と，主による全地の統治が完了する日であります（1 章 21 節）。

最後に，新約聖書におけるオバデヤ書について考察します。

オバデヤ書の内容を個人的に適用すると，自分の

スライド 49

新約聖書では、オバデヤ書がどのように成就したか

- 新約聖書では、オバデヤ書を直接参照していないが、オバデヤ書の根底にあるエサウとヤコブの間の抗争は、展開されている。以下のように、エサウとヤコブの抗争が参照されている。
  - そればかりではなく、ひとりの人、すなわち、わたしたちの父祖イサクによって受胎したリベカの場合も、また同様である。まだ子供らが生れもせず、善も悪もしない先に、神の選びの計画が、わざによらず、召したかたによって行われるために、「兄は弟に仕えるであろう」と、彼女に仰せられたのである。「わたしはヤコブを愛しエサウを憎んだ」と書いてあるとおりである。（ローマ人への手紙9章10～13節）

スライド 50

オバデヤ書の教訓を越えること：
キリストにある希望

- オバデヤ書の教訓では、神の民は救いを受け、異邦人は裁きを受けるということである。
  - しかし、ユダヤ人であろうが、異邦人であろうが、全ての罪を悔い改め、主の御名を呼ぶものは、みな救われると、ローマ人への手紙10章9～13節に述べられている。

口で，イエスは主であると告白し，自分の心で，神が死人の中からイエスをよみがえらせたと信じるなら，あなたは救われます。 なぜなら，人は心に信じて義とされ，口で告白して救われるからです。聖書は，「すべて彼を信じる者は，失望に終ることがない」と言っています。 その上，ユダヤ人とギリシヤ人との差別はない。同一の主が万民の主であって，彼を呼び求めるすべての人を豊かに恵んで下さるからです。 なぜなら，「主の御名を呼び求める者は，すべて救われる」とあるからです。[37]

参考文献

Barton, B.B. et al. *The Life Application Bible*. Illinois: Tyndale House Publishers. 1988.

The Columbia University. “Obadiah (persons in the Bible).” *The Columbia Encyclopedia*, 6th ed. The Columbia University Press.2018.

The Columbia University “Sela.” *The Columbia*

Encyclopedia, 6th ed. The Columbia University Press. 2018.

Hayford, J.W. *Spirit Filled Life Bible*, New King James Version. Nashville: Thomas Nelson Publishers. 1982.

Hindson, E. E. et al. *The King James Study Bible* second edition. Nashville: Thomas Nelson, Inc. 2013.

Thomas Nelson, Inc. *Nelson's Complete Book of Bible Maps and Charts* 3rd ed. Nashville: 1996.

Stamps et al. *The Full Life Study Bible*. Michigan: Zondervan Publishing House. 1992.

Zodhiates, S. *The Hebrew-Greek Key Study Bible* New American Standard. TN: AMG Publishers. 1977.

註

1　当日，多数のご意見，コメントを出席された皆様から頂きました。感謝します。また，話の内容に関しては，多くの参考文献に依存していることを予めお断りいたします。つまり，専門的研究の結果を報告する類のものではないということです。

2　「聞くに早く，語るに遅く」とはヤコブの手紙1章19節「愛する兄弟たちよ。このことを知っておきなさい。人はすべて，聞くに早く，語るにおそく，怒るにおそくあるべきである。」の一部です。

3　オバデヤはエレミヤ，エゼキエル，ダニエルと同時代に生きた預言者であったかもしれません。

4　欽定訳聖書 (King James Version) では，Obadiah（オバデヤ）という語句は聖書全体で合計19節の中に出てきます。

5　聖書の様々な箇所に登場するオバデヤは，どのオバデヤが同一人物であるかに関して，現在に至るまで，明確な結論は引き出せないという見解があります。Zodhiates, S. p.1206.

6　*Ellicott's Commentary for English Readers*, 1 Kings 18:3.

7　第一列王記18章4節。

8　*John Gill's Exposition of the Bible*. 1 Chronicles 12:9.

9　ネヘミヤ記10章5節のオバデヤは同書12章25節のネヘミヤと同一人物かもしれません。

10　Stamps et al. p,1320.

11　*Life Application Bible*. p.1253.

12　*The Full Life Study Bible*. p.45.

13　黙読よりも，声を出して，朗読する方がよりよいことです。イエス・キリスト御自身も，ナザレの会堂で，聖書を朗読されました（ルカによる福音書4章16～19節）。聖書の朗読自体が重要であることは，第一テモテへの手紙4章17節にも書かれています。

14　Hayford, J.W. p.1305.

15　申命記18章20～22節を参照しましょう。

16　Hindson, p.1286.

17　*Benson Commentary*. Obadiah 1:1.

18　オバデヤ書とエレミヤ書49章7～22節の間には多くの類似点があります。

19　英語の慣用句で例えてみると，cut someone down to size と言えます。これは日本語に翻訳すると，実力相応の評価に下げるという意味です。

20　Hayford, J.W. p.1305.

21　*Life Application Bible*. p.1252.

22　*Life Application Bible*. p.587.

23　セラはペトラであると確認されないという見解もあります。The Columbia University "Sela." *The Columbia Encyclopedia.*

24　*Life Application Bible*. p.1252.

25　聖書の文脈はガラテヤ人への手紙6章7～10節を特に参照してください。

26　Hayford, J.W. p.1305.

27　エドム人は貿易を行っており，その貿易相手が同盟者であったので，エドムの地に同盟者が出入りできたという説があります。しかし，聖書の文脈では，こうした貿易関係を読み取ることができません。

28　ヨブ記28章28節にも同様な内容があります。

29　Zodhiates, S. p.1733.　このページは Lexical aids to the Old Testament であり，「恐れ (fear)」に関する原語上のかなり詳細な説明があります。

30　*Life Application Bible*. p.1253.

31　2つあるコメントの2番目のコメントは『オバデヤ書　エドム根性』の引用です。
http://www.logos-ministries.org/old_b/obd.html
（2018年9月30日アクセス）

32　口語訳聖書（1954年版）では「万国の民」と表現されていますが，欽定訳聖書ではall the heathenと表現されています。

33　1章17節に関するコメントはBibleRef.comから引用しています。https://www.bibleref.com/Obadiah/1/Obakindlediah-1-17.html
（2018年9月30日アクセス）

34　1章18節に関するコメントはBibleRef.comから引用しています。https://www.bibleref.com/Obadiah/1/Obakindlediah-1-18.html
（2018年9月30日アクセス）

35　1章19節に関するコメントはBibleRef.comから引用しています。https://www.bibleref.com/Obadiah/1/Obakindlediah-1-19.html
（2018年9月30日アクセス）

36　1章20節に関するコメントはBibleRef.comから引用しています。https://www.bibleref.com/Obadiah/1/Obakindlediah-1-20.html
（2018年9月30日アクセス）

37　ローマ人への手紙10章9～13節